

福山平成大学経営学部紀要  
第15号(2019), 1-18頁

## 『月泉吟社詩』の記録とその変遷

市瀬 信子

福山平成大学経営学部経営学科

**要旨**：『月泉吟社詩』は、元王朝の初期に、浙江各地の詩社から詩を募集して行った詩会の記録である。この詩会は、あらかじめ出された詩題に応じて投稿された詩に、主催者が順位をつけて懸賞金を出すというものであった。投稿者は2700余名にも上り、うち280名が合格となった。そのうち60名の詩を収録したのが『月泉吟社詩』である。『月泉吟社詩』は、宋の遺民が主催したこと、参加者数が多いことなど、当時の詩会の記録として特異であったためか、後世にまで広く伝えられ、多くの文献にこの詩集が取りあげられることとなった。詩会の詩は、集団の詩として重要視されないのが通例であるが、『月泉吟社詩』は、元・明・清王朝と時代を経るごとに大きく取りあげられるようになった。その変化には、文学をいかに記録するかという時代ごとの意識が大きく関わっている。本稿では、詩会の記録が、詩人の伝記資料として利用され、地方誌などの歴史資料にもなっていく過程を、『月泉吟社詩』を通して検証する。

**キーワード**：月泉吟社、記録、詩会

### 1. はじめに

『月泉吟社詩』は、異民族王朝である元王朝が始まって10年後の至元二十三年(1286)、浙江の浦江県で宋の遺民を中心に開催された詩会の記録である。<sup>1)</sup>『月泉吟社詩』の「吟社」は、詩社ともいい、宋代以降盛んになったと言われる。月泉吟社の詩会は、開かれた時期こそ元王朝に入ってからであるが、宋の遺民によって成立していることから、宋代文学の一環としてとらえるべき事象と言える。

王徳明<sup>2)</sup>は、宋代に詩社の活動が盛んであったとし、その詩社を5つに分類する。それは以下の通りである。

- 1, 1つの流派であって、組織化されていないもの。つまり組織としての団体は無く、江西詩社などがこれにあたる。
- 2, ただ1回のみを集会を持つもの。詩社の存在時間は短く、集会が終了すれば、詩社は使命を果たし、存在しなくなる。
- 3, 詩人達が集合する地方の名称を指して詩社とするもの。こうしたものも宋代では詩社と認識されていた。
- 4, 1回の大型の詩歌コンクールのこと。この種の詩社は必ずしも文学集団ではなく、競

技の後に詩社は存在しなくなる。組織力のある1名が社を組織し、詩題を定め、名人を審査員に招く。コンクール終了後には、詩社は存在しなくなる。

5, 組織化された文学団体。この種の詩社は存在時間が長く、活動も普通に行われる。

この5分類の中で、月泉吟社は、4に該当する。4の詩社については、王徳明が指摘するように、『宋詩紀事』などにその痕跡が残っているものがあるが、<sup>3)</sup> その活動の様子を詩集として残しているのは『月泉吟社詩』のみであろう。<sup>4)</sup> 吉川幸次郎は、詩の主流が官僚はなれ、市民に移行した現象を表すものとして、この『月泉吟社詩』をとりあげ、「事からは、この時期では、まだ顕著な資料を、とどめるには至らない。しかし状態を案じる資料は、乏しくない。その第一は、「月泉吟社」と題する小冊子である。数十頁のパンフレットであり、浙江の浦江県、呉渭、字は潜斎の編集である。……要するに当時各地にあった詩社の雑誌の、偶然に遺存するものである。」と述べ、この詩集が遺存したことは偶然によるもので、長く伝えられたことは詩社の詩集としては希有であることを指摘する。<sup>5)</sup>

この希有な詩集については、先に挙げた王徳明「論宋代的詩社」(『文学遺産』1992年第6期)に言及があるのを始めとし、方勇『南宋遺民詩人群体研究』(人民出版社 2000)、楊鎌『元詩史』(人民文学出版社 2003) 欧陽光『宋元詩社研究叢稿』(廣東高等教育出版社 2011)などが『月泉吟社詩』をとりあげ、参加詩人の人物像、あるいは当時の詩社の情況などを明らかにしてきた。鄒艷『月泉吟社研究』(人民出版社 2013)は、月泉吟社研究の専著であり、多角的に月泉吟社詩を分析したものである。こうした研究により、現在『月泉吟社詩』の編者及び参加者の来歴、当時の社会背景などが明らかにされてきた。一方、『月泉吟社詩』という詩集が、後世にどのように受容されたかについては、まだ十分には研究されていない。実は時代によって、『月泉吟社詩』の取りあげられ方は変化してきた。それは詩社や詩社の記録たる詩集に対する各時代の意識の変化を示すものである。詩社を巡る文学状況を研究する際、同じ詩社の記録が時代ごとにどのように扱われたかという変化を知ることが、極めて重要な意味を持つ。

そこで、本稿では、後世の各種文献の中に『月泉吟社詩』がどのように取りあげられたか、またいかなる資料として利用されたかについて考察を加えてゆく。ただし、元刊本は残存していないため、明代の汲古閣本を主な底本とし、そこに記された内容が明代から清代にかけての文献でどのように扱われてきたかを検証する。検証する後世の文献については、清代の厲鶚『宋詩紀事』までをその範囲とする、

## 2. 『月泉吟社詩』とは何か

最初に、『月泉吟社詩』が成立した経緯を明らかにしておく。『月泉吟社詩』は、宋から元に時代が移って10年後に開かれた詩のコンクールの記録である。そのあらましについては、『四庫全書総目提要』に次のようにある。

月泉吟社一卷、宋呉渭編。渭字清翁、号潜斎、浦江人。嘗官義烏令、入元後退居呉溪、立月泉吟社。至元丙戌丁亥間、賦春日田園雜興詩、限五七言律体、以歲前十月分題、次

歳上元収巻、凡収二千七百三十五巻。延致方鳳、謝翱、吳思齊評其甲乙、凡選二百八十八人、以三月三日揭榜。此本僅載前六十人、共詩七十四首、又附録句図三十二聯、而第十八聯佚其名。蓋後人節録之本、非完書也。其人皆用寓名、而別註本名於其下。其人大抵宋之遺老、故多寓遯世之意。 (『四庫全書総目提要』卷一百八十七)

これによれば、詩社の主催者であり詩集を編纂したのが、宋の遺民である浦江の吳渭である。彼の元で開催された詩社のコンクールを月泉吟社と称し、至元二十三年(1286)から翌年にかけて、「春日田園雜興」の題で五七言律詩に詩形を限って詩を募集した。10月に出題し、翌年の1月15日を締切とした結果、2735名の応募者を集める。審査員として方鳳、謝翱、吳思齊の3名を招き、280名を選出して3月3日に発表を行った。『月泉吟社詩』は、この中の60名、詩74首を収録し、聯句図として32聯を収録したものである。みな寓名、つまり匿名の筆名を用いて投稿しているが、本名を注として別につけているという。実際には本籍地及び所属詩社、字号等も記されている。匿名とした理由について、提要は宋の遺民ゆえ、身を偽る必要があったためとしているが、審査の公平を図るためという別の見解もある。これが『月泉吟社詩』に記載されるコンクールの様子と詩集の体裁の概要である。

次に『月泉吟社詩』の構成を見てみる。『四庫全書総目提要』(卷一百八十七)には、「首載社約、題意、誓文、詩評、次列六十人之詩、各為評点、次為摘句、次為賞格及送賞啓、次為諸人覆啓、亦皆節文。」と、その構成内容を示す。汲古閣本『月泉吟社詩』(『詩詞雜俎』所収)を例にとると、最初に田汝籽「刻月泉吟社叙」がある。四庫全書本などは、その途中までを「月泉吟社詩原序」として収録する。ただし「原序」には明の年号「正統十年」(1445)などの記述があり、これも吳渭刊行の原本につけられたものではない。続いて「月泉吟社」と表記した社約があり、これは月泉吟社の主催者吳渭によるものである。<sup>6)</sup> 続いて「春日田園題意」、「誓詩壇文」、「詩評」がある。これらは基本的に主催者がこのコンクールにおける詩題に込めた意義、詩社の意義、詩評の意義を宣言したものである。「詩評」の最後に「時元之前至元二十四年也。」と注で締切の時期を記している。

次に「送詩賞小割目録」、「回送詩賞割目録」、「月泉吟社目録」(摘句附)<sup>7)</sup>として、受賞者の情報を記すが、「送詩賞小割目録」は、授賞した詩人の寓名を羅列するのみである。

与羅公福 与司馬澄翁 与高宇……

「回送詩賞割目録」は、上記の「与」を抜いた形で同じ寓名を羅列する。

「月泉吟社目録」(摘句附)は、順位と寓名と詩型と詩数を第60位まで記す。

第一名羅公福 七言律詩一首 第二名司馬澄翁 七言律詩一首 第三名高宇  
七言律詩一首 (以下同じ)

その後「春日田園雜興 律五七言四韻余体不取」とし、第1位から順に各受賞者の寓名と注(本籍、詩社、本名もしくは字号など)、紹介、評文、詩が第60位まで並べられる。これが提要にいう「次列六十人之詩、各為評点」の部分である。この部分は以下のように表記される。

第一名羅公福（杭清吟社、三山連文鳳伯正、号応山）

評曰、衆傑作中、求其粹然無疵、極整齊而不窘辺幅者、此為冠。

老我無心出市朝、東風林壑自逍遙。一犁好雨秧初種、幾道寒泉葉旋澆。放犢曉登雲外壟、聽鶯時立柳辺橋。池塘見説生新草、已許吟魂入夢招。

第二名司馬澄翁（義烏馮澄、字澄翁、号来青）

起善包括、兩聯説田園的、而雜興寓其中、末語亦不汎。

編闌春思倩吟鞭、著面和風軟似綿。黃犢烏犍秧穀候、雄蜂雌蝶菜花天。把鉏健婦踏煙壟、抱甕夫人分野泉。忙事關心在何処、流鶯不聽聽啼鶯。

第一名を例に取ると、最初に投稿者の寓名があり、人物に関する注が附される。注には「杭清吟社」という所属詩社が記され、続いて地名、本名、号が記される。羅公福でいうと、三山が地名、連文鳳が本名、伯正が別名、応山が号である。第二名の場合は、司馬澄翁が寓名、義烏が地名、馮澄が別名、来青が号となる。所属詩社については、『月泉吟社詩』では、記載のないものもあるが、杭白雲社、孤山社、武林社、武林九友会などの名が記され、これらは当時の詩社を伝える貴重な資料となっている。地名、本名、別名の表記については、人物ごとに不統一であり、定型がない。例えば「第四名仙村人（古杭白雲社）」は、吟社名のみが記載され、本名はなく、「第十名呂澹翁（東陽名文老）」とのみ記され、出身地、本名の記載がない。こうした注の不統一については、注が後世のもので、資料を揃えられなかった可能性が考えられる。欧陽光は、「この別注はみたところ原刻本にあったのではなく、後の人が加えたものであり、故にただ寓名だけがあって別注があるのであり、あるものは別注が簡単すぎるし、その本名がわかるものがない。」<sup>8)</sup> という。しかし、「社約」を見ると「明書州里姓号、以便供賞。」と、賞品を送る都合上、住所姓名などを明記するようにとの注意書きがある。つまり本名、住所などの情報は、当時投稿者からすでに提供されていたのである。ただ、『四庫全書総目提要』がいうように、当時宋の遺民として匿名であることが必要であったとするなら、注が後世につけられた可能性もある。いずれにしても、注の時期を特定するには資料が乏しく、内容についても今後の検証が必要であろう。

続いて第一名の「評曰……」で始まる部分は、審査員による評であり、第二名以下は「評曰」が省略される。評の後に、受賞作の詩が記載される。

一連の詩と詩評の後には「摘句図」があり、「起句」、「聯句」、「結句」の順で、詩句と寓名のみが記された部分が続く。これが『提要』の「次為摘句」の部分であり、「名利有危機、老於農圃宜（無機老農）、馭却余寒碎土牛、田園生計又従頭（子問）……」と、詩句と寓名のみが記される。詩全体を収録することではなく、作者についても寓名以外の情報は無い。以上が詩句に関わる記載である。

その後には受賞後のやりとりが記される。「送詩賞小劄」には、最初に順位に応じた賞品が羅列される。例えば「第一名公服羅一縑七丈筆五貼墨五笏、第二名公服羅一縑六丈筆四貼墨四笏……」のように、生地、筆墨などが賞品とされたようだ。最後が「第三十一名止

五十名各筆一貼墨一笏吟箋二沓」となっているところから、賞品は第50名までしか出なかったようである。その後には、各詩人への送り状、詩人からの礼状「回送詩小劄」が記載されるが、それは上位者に限り、しかも全員ではない。これが提要に「亦皆節文。」とある理由である。最後に孟晋の跋文が付けられている。<sup>9)</sup>以上が詩集の構成である。

このように主催者、審査員、募集の状況、募集の結果までを記した、コンクールの報告書が、この『月泉吟社詩』なのである。

以上、『月泉吟社詩』の全容をやや細かに見てきたのは、これらが時代を経て、何が取捨選択され、何が増補されて記録されたのかを比較して明らかにするためである。以下、時代を経てこの詩集がどう利用されたかを検証してみることとする。

### 3. 明代における『月泉吟社詩』の記録

元王朝で『月泉吟社詩』がどのように扱われたかについては、ほとんど記録が見当たらない。元王朝が亡び、明代になると、この詩集は再刊される。元末明初の学者である陶宗儀は『説郛』に『月泉吟社詩』を収録する。ただし完全なものとは言えない。最もまとまった形であり、後世に広く読まれたのは、明末の毛晋(1599~1659)の汲古閣本である。刊本が出されたのは、月泉吟社への関心が高かったことを示すものでもある。ただし、本稿では他の文献において『月泉吟社詩』がどう取りあげられ利用されたかに主眼を置くため、刊本そのものの比較検討は行わず、『月泉吟社詩』を取りあげた各種文献の検討を行う。

まず、明代における『月泉吟社詩』の位置づけの基本となるものとして、李東陽(1447-1516)『懷麓堂詩話』を見ておく必要がある。

元季国初、東南士人重詩社。每一有力者為主、聘詩人為考官、隔歲封題于諸郡之能詩者、期以明春集卷。私試開榜次名、仍刻其優者、略如科舉之法。今世所傳、惟浦江吳氏月泉吟社、謝翱為考官、春日田園雜興為題、取羅公福為首。其所刻詩以和平温厚為主、無甚警拔、而卷中亦無能過之者、蓋一時所尚如此。聞此等集尚有存者、然未及見也。

ここでは、元から明初にかけて詩社が重んじられたこと、それらが科挙の方法を模倣した形式のものであったことをいう。また「今世所傳、惟浦江吳氏月泉吟社」、「聞此等集尚有存者、然未及見也。」と、こうした詩社の記録が月泉吟社以外には残っていないことを指摘する。詩社の隆盛と記録の希少が『月泉吟社詩』の価値を高めたことがわかる。

#### 3.1 李詡『戒庵老人漫筆』

明代に『月泉吟社詩』の内容を詳細に記したものの1つに、李詡(1506-1593)の『戒庵老人漫筆』がある。この書は明代の政治経済を記していると同時に、宋元の貴重な詩文を記録することでも知られる。『戒庵老人漫筆』巻六に「月泉吟社」があり、筆記の中にもかわらず、『月泉吟社詩』の概要と構成を伝えるものとなっている。

勝国季年、東南士人有力之家最重詩社、聘有詩名者為主、如科舉之法。今行世者、如月泉吟社集其一也。初吳公渭以故宋義烏知縣解組家食、延致鄉遺老方公鳳、謝公翱、吳公思齊主於家、開社命題、鑑別高下、榜示褒賞、誠一時之勝舉哉。今撮其集中大略、以便稽考云。……  
〔『戒庵老人漫筆』卷六〕

まず李東陽『懷麓堂詩話』を踏まえ、月泉吟社の概要を述べる。最後に、考察に便利なように大略を記す、とあり、この文に続けて『月泉吟社詩』を引用する。つまり「社約」、「春日田園雜興題意」、「誓詩壇文」、「詩評」をそのまま引用し、続いて受賞者とその詩を挙げる。その形式は、寓名、注、評、詩の順に並び、『月泉吟社詩』そのままである。ただし引用される詩人は第一、二、三、八、十、二十三、三十、四十八、四十九、五十、五十一位のみであり、その理由については記さない。摘句は収録しない。ここは『月泉吟社詩』と異なる点である。更に「送詩賞小劄」として賞品などを、そのまま引用するが、人名はなく、順位と賞品のみを並べる。その後には、これも人名は記さないままに羅公福の「送詩賞小劄」、「回送詩賞劄」の文をそれぞれ挙げる。

この筆記の特徴は、『月泉吟社詩』の構成内容に関しては、摘句以外ほぼ網羅しており、しかも原文をそのまま記載することで、原書がいかなるものかを伝えることができる点である。興味を中心は、月泉吟社の実施状況、選詩基準、賞品といった詩会の実施状況を伝える部分である。一方、詩人の名は全ては挙げられず、賞品の送付文、礼状にしても、羅公福の名を記さずに文だけを引用するなど、個々の詩人の情報については、ほとんど興味を示していない。また摘句も引用せず、詩の文学性そのものにも興味を示しているとはいいがたい。つまり、この筆記は、月泉吟社という詩会がいかに行われたかを記録しようとしているのである。最初に李東陽を引用して詩社の記録が少ないことを述べていること、またこの筆記自体が他にも歴史書を補うべき資料を多数記録していることから、この筆記は、詩社の歴史を伝える一資料として、『月泉吟社詩』を記録したと考えられる。

### 3.2 錢謙益『牧齋初学集』

錢謙益（1582-1664）は、明末の万曆十年に生まれ、清朝の康熙三年に没し、明清兩王朝に仕え「弑臣」と目された。清朝で官職を辞した後、反清に転じたとして乾隆帝の時に詩文が禁毀対象とされている。『牧齋初学集』は、錢謙益の門人である瞿式耜によって明崇禎十六年九月に完成されたもので、明末の詩文集である。その中に「記月泉吟社詩」がある。

#### 「記月泉吟社」

月泉吟社倣鎖院試士之法、以丙戌小春月望命題、丁亥正月望日收卷、三月三日揭曉。以春日田園雜興為題、收二千七百三十五卷、選中二百八十名。自第一名羅公福至六十名、賞羅縑深衣布筆墨有差、送詩賞各有小劄往復。主其事者、浦陽月泉社、詩盟吳渭清翁、主考謝翱臯羽。其年前至元二十四年也。按胡翰作謝翱伝、謂其自勾越之越之南鄙、依浦陽江方鳳、永康吳思齊亦依鳳、三人皆高年、俱客吳氏里中。……諸為臯羽立伝者、亦不

列涓名。非吟社之刻、則涓幾泯没無伝。余故表而出之。本朝程克勤輯宋遺民録。載王鼎翁、謝臯羽輩、僅十有一人。余所見遺文逸事、吳越間遺民已不啻數十人、欲網羅之、以補新史之闕、以洗南朝李侍郎之恥。 (錢謙益『牧齋初學集』卷八十四題跋二)

錢謙益の記述は、月泉吟社が科挙に倣ったものであることに始まり、作品を公募した時の情況、『月泉吟社詩』への収録人数、賞品、賞品につけた送り状と礼状など、詩集全体の構成と内容を簡単に紹介する。簡略ながらも詩集の形式を記録しようとするのは、『戒庵老人漫筆』と通じる点である。次に、主催者たる吳涓のことに触れ、審査員である3名と吳涓との関係を述べる。以下中略部分は、吳涓に関する記述である。錢謙益の興味は、主催者たる吳涓にある。審査員の謝翱は伝記があっても、吳涓の名が知られていないこと、『月泉吟社詩』の刊行がなければ、ほとんど忘れられて記録が残らなかったであろうことを指摘する。錢謙益の興味が吳涓にあるのは、程克勤の『宋遺民録』と共に記していることから、宋の遺民であることがその大きな理由であることがわかる。ただし、コンクールに参加した詩人も宋の遺民であるのだが、そちらについては一切触れない。「補新史之闕」とあることから、歴史を補うべき資料は参加者ではなく、詩社を主催した人物と考えてのことであろう。詩句については触れていないことから、文学的な資料としての価値をこの詩集に認めているわけではないことも見て取れる。これも詩人を取りあげない一因でもあろう。しかしながら、詩社の記録が歴史の記録となりうることを示したのは、明末から清に至る意識の一端を表すものと言える。

#### 4. 清代における『月泉吟社詩』の記録

清代は、明代と比較すると、詩社についての詳細な記録が非常に多く残されるようになった。清初の朱彝尊(1629-1709)、王士禎(1637-1711)のように、個人で詩社のことを書き留める例も多い。一方、清朝は皇帝が書物の編纂に熱心であり、康熙帝から乾隆帝まで、翰林院を中心に様々な編纂事業を行っている。そうした中で、『月泉吟社詩』は、詩社の記録を残した貴重な史料として、取りあげられるようになる。そのようすを以下に見てゆく。

##### 4.1 『御選宋金元明四朝詩』

『御選宋金元明四朝詩』は、康熙帝が張予章らに命じて編纂させたもので、宋、金、元、明四朝の詩を収録して三百十七巻とし、康熙四十八年(1709)に完成した。御選と銘打たれ、各時代を代表する詩を集めた権威ある総集ということになる。この詩集は各時代の詩集の巻首に「姓名爵里」として作者の姓名、官爵、郷里等を記す。作品は皇帝の御製詩を最初に起き、四言詩、樂府歌行体など、詩型別に編纂される。この詩集は、詩の出处を示さないため、「月泉吟社」という文字は一切出てこない。しかし、月泉吟社の詩題「春日田園雜興」で、『月泉吟社詩』の詩の多くを収録している。『月泉吟社詩』に収録された受賞者は60名、重複詩人があるため実際には53名であるが、そのうち、第十一名方賞、第十二名鄧草徑、第十四名喩似之(喩似之は収録されるが、「春日田園雜興」詩は採録されてい

ない。)、第十五名躡雲、第二十名学古翁、第二十四名安定書隱、第三十名愛雲仙友、第四十一名冷泉僧志寧、第四十七名臨清、第四十八名感興吟、第五十四名襲慶陳文増の11名を除いた、実に42名もの「春日田園雜興」詩が収録される。しかもその大半は「春日田園雜興」詩のみで収録される無名の詩人達である。彼らは一度のコンクールでの入賞作品のみを以て、時代を代表する詩人とされたと言える。

詩人の表記に関して、『宋金元明四朝詩』姓名爵里と、『月泉吟社詩』の詩人小伝とを比較してみよう。

『月泉吟社詩』第一名羅公福（杭清吟社、三山連文鳳伯正、号応山）

『宋金元明四朝詩』宋詩「姓名爵里二」連文鳳（字伯正、号応山、三山人。入元変姓名、曰羅公福。） \*（ ）は注を表す。句読点は筆者による。以下同じ。

『月泉吟社詩』では、寓名つまり筆名を最初に記載するのに対し、『宋金元明四朝詩』姓名爵里では、まず本名を記し、その後には字号などを記す、いわゆる歴史資料の伝記と同じ順序で記載する。また「羅公福」の名称について、元朝になって名を変えたもの、としてるように、事実に関する記載が詳細になっている。更に『月泉吟社詩』にあった所属吟社に関する情報が削除されているのも特徴的で、唯一第四名仙村人の項に「仙村人、逸其姓名、入元結古杭白雲社。」と記されるのみである。この人物に関しては、『月泉吟社詩』に「第四名仙村人（古杭白雲社）」とのみあり、他の情報が無い。更に加えるべき情報も入手できなかったため、記すべき唯一の伝記情報として吟社を記載したと思われる。<sup>10)</sup>

さて、月泉吟社の詩人たちは宋に生まれ、遺民として元で詩社に参加しているが、当該詩集では、宋と元とに分けて収録されている。多くは宋に入れられ、第五名山南隱逸、第八名倪梓、第十八名唐楚友、第四十四名仇近村の4名のみが元に分類される。このうち1名について『月泉吟社詩』注と『宋金元明四朝詩』姓名爵里を見てみよう。

仇近村

『月泉吟社詩』第四十四名仇近村（古杭、山村、仇遠、字仁近。）

『宋金元明四朝詩』元詩「姓名爵里一」仇遠（字仁近、一字仁父、錢塘人、至元中官溧陽州教授、自号近村、又称山邨。有山村遺稿。）

これは詩人として名高い仇遠（仇近村）についての記述である。『月泉吟社詩』と比較すると、『宋金元明四朝詩』が、詩人に関する記載が非常に詳細な点は先に見たとおりで、任官の状況、作品集についての情報も加えられている。また「至元中官溧陽州教授」と、元王朝での任官を記しており、そのために元詩に収録していると推測できる。他の白斑（唐楚友）、劉応龜（山南隱逸）についても同様で、元での任官の記録があり、元詩に収録される根拠を示しているのだが、残る1人陳堯道については、『宋金元明四朝詩』に元朝での任官を示す記録がなく、なぜ元詩に分類されたのかは不明である。<sup>11)</sup>



ここで『宋金元明四朝詩』における『月泉吟社詩』の記録の特徴をまとめると、まず月泉吟社という詩社の名称を全く出さずに月泉吟社の詩人達の作品を多く記録した初めての詩の総集だという点があげられる。詳細な小伝がつけられ、コンクールの入賞者を一詩人として認めたことは、明とは全く異なる点である。これは遺民の詩社の活動たる面が強調され、個々の詩人の記録に乏しかった明代とは全く異なる点である。

つまり詩社の活動を記録する冊子としての詩集は、およそ一時的なものとして作られており、雑誌のごときのものであった。そして明代では、雑誌である『月泉吟社詩』をとりあげるにあたり、詩社の活動の記録、また遺民の記録として、主催者や詩会の形態に重点を置いて記録していた。ところが清代の『宋金元明四朝詩』は、詩社の活動ではなく、詩を作品として価値あるものとして位置づけ、その作者たちも詩会の詩一首で詩人として認めることとなった。詩人として認知されたが故に、その伝記は事実に基づいて詳細に検討され、歴史的資料として伝えるべく整えられているのである。

伝記の中に詩社が記されないこと、月泉吟社について何も触れない理由は記されていないが、幾つか考えられる要因がある。一つは、それまで詩会における集団の詩は遊びの詩とみなされ、文学性に対する評価が低かったことである。著名人同士の唱和は別として、蘭亭詩宴にしても、王羲之の序ほどには、詩会の詩は評価されていない。またもう一つには、順治十七年、清朝政府が結社の活動を禁止したという背景が考えられる。明末の文人結社が政治団体としての力を増し、大きな抗清勢力となったことを踏まえての処置であったが、この詩集は康熙帝の勅命によって編纂されたものであり、やはりこの結社の禁を無視した記述をすることが難しかったのではないだろうか。

こうした事情を考慮するとしても、『宋金元明四朝詩』は、『月泉吟社詩』の記録における、明から清への大きな時代の転換を示すものであることは間違いない。それは詩会という催しの記録から、詩と詩人の記録へと変化したことである。

## 4.2 王士禎の記述

王士禎（1637-1711）の月泉吟社への言及はよく知られるところである。王士禎は、筆記の中でしばしば月泉吟社に触れている。中でも『月泉吟社詩』に対し、自ら改めて審査し、順位を入れ替える試みを行った。

宋末浦江吳渭倡月泉吟社、賦田園雜興近体詩、名士謝朝輩第其高下、詩伝者六十人、清新尖刻、別自一家。予幼於外祖鄒平孫公家見古刊本、後始見琴川毛氏本、常遍和之。竊謂臯羽所品高下、未尽当意、因戲為易置次第如左。春日田園雜興。第一名子進、本名魏新之、号石川。第二名魏子大、梁必大。第三名全泉翁、全璧、字君玉。第四名山南隱逸、劉応龜、字元益。第五名躡雲、翁合老、仲嘉。第六名仙村人、第七名方賞、方德麟、号蔵六。第八名高宇、梁相、字必大。第九名俞自得、第十名槐窓居士、黄景昌。十一名東湖散人、十二名徐端甫、十三名仇近村、仇遠、字仁近。十四名陳希邵、陳舜道。十五名子直、魏石川。十六名司馬澄翁、馮澄、字澄翁。十七名陳緯

孫、何教。十八名聞人仲伯、陳希声。十九名君瑞、二十名田起東、劉汝鈞、号蒙山。二十一名羅公福。連文鳳、号応山、原第一名。

(王士禎『池北偶談』卷十九 談芸九「月泉吟社」)

ここでは、『月泉吟社詩』では第六位であった魏新之が第一位となり、元々一位であった連文鳳が二十一位とされるなど、二十一位までを独自の判断で入れ替えている。元々の順位を〔 〕に示すと、以下のようになる。

第一位子進、魏新之〔6〕、第二位魏子大、梁必大〔13〕、第三位全泉翁、全璧〔9〕、第四位山南隱逸、劉応龜〔5〕、第五位躡雲、翁合老、仲嘉〔15〕、第六位仙村人〔4〕、第七位方賞、方徳麟〔11〕、第八位高宇、梁相〔3〕、第九位愈自得〔42〕、第十位槐窓居士、黄景昌〔25〕、第十一位東湖散人〔43〕、第十二位徐端甫〔37〕、第十三位仇近村、仇遠〔44〕、第十四位陳希邵、陳舜道〔31〕。第十五位子直、魏石川〔53〕、第十六位司馬澄翁、馮澄〔2〕、第十七位陳緯孫、何教〔45〕、第十八位聞人仲伯、陳希声〔51〕、第十九名君瑞〔59〕、第二十位田起東、劉汝鈞〔17〕、第二十一位羅公福。連文鳳〔1〕。

王士禎は、一連の「春日田園雜興」という詩題の詩に対し、文学的評価を試みている。評価の基準となった実際の詩句を取りあげていないのは、『月泉吟社詩』がすでに世間に流布していたためであろう。詩人の名称の表記は、『月泉吟社詩』をそのまま利用しており、寓名をまず挙げ、その後に本名を記す。月泉吟社詩の内容を省略する部分はあるが、補填することはない。ここでは月泉吟社というコンクールに興味を示しつつも、その焦点はあくまで詩であり詩人である。その点は、詩と詩人に注目した『宋金元明四朝詩』と同じ傾向を示していると言えるだろう。

#### 4.3 『南宋雜事詩』

『南宋雜事詩』は南宋の遺事を題材とした詩集で、乾隆十一年(1746)に刊行された。杭州詩人である沈嘉轍、吳焯、陳芝光、符曾、趙昱、厲鶚、趙信の7名によって作られ、符曾が百一首を詠じた他は、六名が各百首ずつを詠じた、計七百一首の大規模な雜事詩である。詩集の形式は、詩一首ごとに、南宋の遺事を読み込み、詩の後に、詩の内容が基づいた史実や典故を引用書名と共に挙げる注を付けるというものである。注の分量は、詩句を遙かに凌ぎ、詩七百一首に対して、典故が数千条、引用書は千種に及ぶ。月泉吟社は、卷七の趙信の最後の詩の注に登場する。詩は以下の通りである。

桑海英風不可攀、南朝寂歴旧江山。惟余幾輩才人在、詩卷長留天地間。

桑海英風 攀ずべからず、南朝寂歴たり 旧江山。惟だ余す幾輩の才人の在るを、詩卷長く留まる 天地の間。

この一首は、宋王朝が亡んだ後、優れた詩人の作が世に残され伝えられたことをいう。注には、『淵穎集』、『天地間集』、『月泉吟社』、『谷音』、『宋遺民録』、『樂府補遺集』と、いずれも宋の遺民の集が引用される。中でも月泉吟社については特に詳細に取りあげられている。

月泉吟社、潜齋吳渭清翁集、渭以故宋義烏令、入元不仕、退居吳溪、延致方韶父、謝阜羽、吳子孟、作月泉吟社、四方吟士從之。以田園雜興命題、凡得二千七百三十五卷。三子為其評校、選中二百八十名、甲乙其名次、出一榜、各有賞給。今列其詩者僅六十名。題名多隱号、間有重名。因詩為次。……其間或有名、或無名、大抵皆宋末遺老也。旧有黃顯序、明正徳中、田汝籽重序刊行。

ここでは、『月泉吟社詩』が吳渭によって編集されたことと、吳渭の人物についてまず記す。元で仕官していないことを記し、また遺民の名士たる審査員の3名の名を記しているのは、この詩が注に全て宋の遺民の集を列挙していることに関わるものである。詩題や収録の状況は、『月泉吟社詩』の「送詩賞小割」などに基づいて、参加者数、賞品の授与、収録詩人数を記し、更に詩人が本名でなく匿名となっていること、重複も見られることなどを記す。最後に参加者の多くが宋末の遺老であったことを記す。上記で中略した部分には『月泉吟社詩』の順位に従って詩人の名が記される。その部分を以下に示す。

第一羅公福、杭清吟社、三山連文鳳也。第二司馬澄翁、義烏馮澄也。第三高宇、杭州梁相也。第四仙邨人。註、古杭白雲社。第五山南隱逸、義烏劉応龜也。第六子進、分水魏新之也。第七栗里、金華楊本然也。第八倪梓、義烏陳堯道也。第九全泉翁、孤山社全璧也。第十呂淡翁、東陽呂文老也。第十一方賞、桐江方徳麟也。第十二鄧草徑、三山劉汝鈞也。第十三魏子大。註、武林九友会。第十四喩似之、分水何鳴鳳也。第十五躡雲、建徳梓州翁合老仲嘉也。第十六玉華吟客、分水林子明也。第十七田起東、崑山劉蒙正也。第十八唐楚友、孤山社白斑也。第十九識字耕夫、武林社秦州周暉也。第二十学古翁、桐江趙必范也。第二十一社翁、釣台姚潼翔也。第二十二騎牛翁、三山高鎔也。第二十三天目山人、義烏吳瑀也。第二十四四安定書隱、義烏胡南也。第二十五槐窓居士、浦陽黄景昌也。第二十六姜仲沢、金華姜霖也。第二十七陳柔著、武林社陳必曾也。第二十八方尚老、桐江方子静也。第二十九朱孟翁、東陽人也。第三十愛雲仙、杭白雲社趙必折也。第三十一陳希邵、義烏陳舜道也。第三十二劉時可。双溪人也。第三十三岳重、武林九友会僧了慧也。第三十四雲東老吟、義烏許元発也。第三十五避世翁、義烏洪貴叔也。第三十六觀我、金華楊舜举也、舜举即本然之字。第三十七徐端甫、義烏人也。第三十八龜潭朱积老、金華人也。第三十九樵逸山人、洞江李萼也。第四十柳圃、月泉陳君用也。第四十一臨泉僧志寧、杭人蔡潭也。第四十二吟隱愈自得、金華人也。第四十三東湖散人、註、古杭人。第四十四仇近村、古杭仇遠也。第四十五陳緯孫。註、即分水何鳴鳳。第四十六陳鶴阜。註、即月泉社陳君用。第四十七冷清、建徳王進之也。第四十八感興吟。註、桐

江人。第四十九王進之、建德人也、即上冷清。第五十元長卿、義烏陳希声也。第五十一聞人伯仲、即陳希声。第五十二戴東老。註、月泉社人。第五十三子直。註、即魏新之。第五十四龔慶、苕水陳文增也。第五十五九山人。註、寓杭。第五十六桑柘区、金華人也。第五十七柳州。註、月泉社人。第五十八草堂後人、杭人也。第五十九君瑞、桐江人也。第六十青山白雲人、杭人也。已上詩皆全。

後又列摘句、有無機老農、子問、田農夫、唐人機軸、忘懷老人、五雲山人、老農、劉存存、石姥寄客、双澗、雲水、白雲人、傳宣山、自家意思、柳耆、兪如山、跨犢者、山野人、盤隱末子、扶杖夫、廷雲、翁自適、郭建德、駱備賓、陳帝臣、晚静、竹蓑笠翁、兪野処、藍田道人、林泉生、傳九万、才人。

『南宋雜事詩』の注には長いものが多いが、この注は最も長い部類に属す。「已上詩皆全」とあるが詩句は記録されず、『月泉吟社詩』に採録された全ての詩人を、元で仕官したか否かにかかわらず網羅し、更に『宋金元明四朝詩』が採録しなかった「摘句」の作者も全て収録する。これまでの『月泉吟社詩』の記録の中では、採録詩人数が最も多く、完全なものということになる。ただし、『月泉吟社詩』で闕名となっている摘句については作者名を記載していない。詩句、詩評などは一切収録していないこと、「送詩賞小劄」「回送詩賞劄」も収録していないことから、その関心は、詩人の記録にあつて、詩の文学性の評価にはないと言える。他の書物が記していた賞品など、月泉吟社のコンクールの実施方法も無視されており、重要視されているのは詩人のみである。人物の記名方法を『月泉吟社詩』と比較すると以下のようなになる。第一位の羅公福の記述について見てみよう。

『月泉吟社詩』	第一名羅公福（杭清吟社、三山連文鳳伯正、号応山。）
『宋金元明四朝詩』	連文鳳（字伯正、号応山三山人。入元変姓名曰、羅公福。）
『南宋雜事詩』	第一羅公福。杭清吟社、三山連文鳳也。

『南宋雜事詩』の記載は、順位、寓名、所属詩社、本籍地、本名の順になっている。寓名、本籍地、名の並び順及び記載内容については、『月泉吟社詩』をそのまま利用している。ただし『月泉吟社詩』では、「伯正、応山」と、号を始めとする別称も記載しているが、それらは省略され、寓名と本名のみには絞られている。『宋金元明四朝詩』が本名をまず記し、歴史事実の正確な記録を残そうとしていたのに比べると、『南宋雜事詩』は、『月泉吟社詩』を簡略にしながらも、本来の詩集の姿を優先しようという方針であることがうかがえる。故に『宋金元明四朝詩』に見える「入元変姓」などの情報も採用せず、『宋金元明四朝詩』が記載しなかった「杭清吟社」などの詩社の名称については、そのまま載せている。

また、『宋金元明四朝詩』と大きく異なるのは、「摘句」を全て収録している点である。摘句は『月泉吟社詩』では、寓名のみで本名その他の情報は全く記されていない。「無機老農」、「子問」、「田農夫」などの署名はいずれも寓名である。『南宋雜事詩』は、「摘句」にある寓名を全てそのまま記載する。一方、汲古閣本では署名が欠けていたところに、「清溪

叟」を入れ補っている。<sup>12)</sup> その結果、『南宋雜事詩』は、主催者について触れつつ、『月泉吟社詩』に収録された、無名の詩人を伝える資料となったのである。「四庫全書総目提要」卷一百九十では、「南宋雜事詩七卷。……一代故実、巨細兼該、頗為有資於考証。蓋不徒以文章論矣。」と、一代の故実についてつづさに記し、歴史考証に資するものであることを指摘する。『月泉吟社詩』は歴史資料として取りあげられ、収録された詩人達は、詩集を持たず、ひいては隻句のみでも、『月泉吟社詩』を目にすることができない人々にとっても、月泉吟社の名と共に、歴史に残る詩人として知られることとなったのである。

#### 4.4 『宋詩紀事』

『宋詩紀事』は、『南宋雜事詩』制作者の一人であった厲鶚によって編纂されたもので、乾隆十一年にまとめられた。『宋詩紀事』の特徴は、収録詩人数の多さにある。『宋詩紀事』出版説明（上海古籍出版社 1981）によると、康熙年間の『宋金元明四朝詩』（康熙四十八年 1754）では、宋詩はわずかに78巻882名の詩を収録するのみである。更に呉之振等編纂の『宋詩鈔』（康熙十一年 1746）は106巻、84名の詩を収録するが、専集があり詩が五首以上あることを収録の条件としている。それに対し、宋詩紀事は蔵書家馬氏の蔵書を用い、あらゆる書物から作品を選び、詩人3812名（厲鶚序による）を収録しているという。<sup>13)</sup> 厲鶚自身も「刻宋詩紀事啓」で、「苟片言之足採、雖隻字以兼收。此則宋詩紀事之大略也。」（厲鶚『樊榭山房続集』卷七）と、個人の集がなくとも、詩の数が揃わなくとも、佳句であれば収録するという方針で詩を集めている。その結果、『月泉吟社詩』の中の「摘句」も全て収録されることとなった。その記録方法は以下の通りである。比較のために、寓名「羅公福」の記載を『月泉吟社詩』『宋金元明四朝詩』も挙げておく。

##### 『月泉吟社詩』

第一名羅公福（杭清吟社、三山、連文鳳、伯正、号応山。）

評曰、衆傑作中、求其粹然無疵、極整齊而不窘辺幅者、此為冠。

老我無心出市朝、東風林壑自逍遙。一犁好雨秧初種、幾道寒泉藥旋澆。放犢曉登雲外壟、聽鶯時立柳邊橋。池塘見說生新草、已許吟魂入夢招。

『宋金元明四朝詩』卷二姓名爵里 ※詩は卷五十六に収録される。

連文鳳（字伯正、号応山、三山人。入元変姓名、曰羅公福。）

##### 『宋詩紀事』卷八十一

連文鳳（以下月泉吟社）

文鳳、字伯正、号応山、三山人、杭清吟社。入月泉吟社第一名、託名羅公福。

（黄灝月泉吟社序、浦江吳渭、字清翁、号潜斎、宋時嘗為義烏令、元初退食于吳溪、延致鄉遺老方韶父与閩謝舉羽吳思齊主于家、始作月泉吟社、四方吟士從之、三子者乃為其評較掲賞云、又送詩賞小劄序、月泉社吳清翁盟詩、預于丙戌小春望日、以春日田園雜興為題、至元丁亥正月望日収卷、月終結局収二千七百三十五卷、選中二百八十名三月三日掲榜。第一名公服羅一縑七丈、筆五貼、墨五笏。第二名公服羅一縑六丈、筆

四貼、墨四笏。第三名公服羅一縑五丈筆三貼墨三笏。第四名止第十名、春衫羅一縑、筆二貼、墨二笏。第十一名止二十名、各深衣布一縑、筆一貼、墨一笏。第二十一名止三十名、各深衣布一縑、筆一貼。第三十一名止五十名各筆一貼墨一笏吟箋二沓)

春日田園雜興

老我無心出市朝、東風林壑自逍遙。一犁好雨秧初種、幾道寒泉藥旋澆。放犢曉登雲外壟、聽鶯時立柳邊橋。池塘見說生新草、已許吟魂入夢招。

評云、衆傑作中、求其粹然無疵、極整齊而不窘迫幅者、此為冠。

『宋詩紀事』卷八十一では、連文鳳の名の後に「以下月泉吟社」とあるが、これは連文鳳以降、37名の月泉吟社の詩人を載せ、その後ろに「月泉吟社摘句函」として、寓名と摘句を全て載せることを指す。卷九十六には無名子として、仙村人はじめ10名の詩を載せるが、この10名は『宋金元明四朝詩』でも、本名が不明なものとして扱っている。

これらを比較してみると、『宋詩紀事』は、『宋金元明四朝詩』と同じく、本名をまず記している。これは史実を記すには本名を先にすべきという考えによるものであろう。また詩と詩評の位置については、『月泉吟社詩』が審査員の評を前に置くのに対し、『宋詩紀事』は詩を前にし、評を後ろに置く。これは『月泉吟社詩』がコンクールという催し物の記録であるため、審査員の評を中心にし、一方『宋詩紀事』は、詩の総集として、詩を前に出し、参考として評を後ろに附すという形をとるものと考えられる。『宋金元明詩朝詩』は詩評を記載しない。作者の情報については、『宋詩紀事』は『月泉吟社詩』を踏まえるが、「三山」が地名であること、字が伯正であることなど、『宋金元明四朝詩』と同じく、詳細に記してある。編者の厲鶚が『宋金元明四朝詩』の記載内容を参考にしたのかという点については、一緒に編纂事業に携わった全祖望が翰林院で書物を見て調査結果を厲鶚に送っており、全祖望を通して内容を知ることができた可能性が高い。また伝記の記載の詳細さという点でいうと、第六名「子進（分水魏石川先生、名新之、字徳夫。）」(『月泉吟社』)を『宋金元明四朝詩』が「魏新之、字徳夫、一字子進、又作子直。桐廬人。登咸淳七年進士第除鄞府教授。」(卷五十五)としているのに対し、『宋詩紀事』で「魏新之。新之、字徳夫、号石川、分水人。咸淳七年進士慶元教授、月泉吟社第六名、自署子進。」と、教授になったことについての記述はやや変えながらも引き継ぎ、「号石川」という新しい情報を加えている。これは厲鶚らが新たに書籍を調査した成果を加えたものであろう。故に、『宋詩紀事』は、無名の詩人たちの伝記資料としては、当時最も詳しいものとなっている。ただし、「入元変名」などの、元での匿名に関する記述は採用していない。また、『宋金元明四朝詩』が詩社の記載を一切省いていることは先に指摘したが、『宋詩紀事』は、詩社の記録は残している。このように、取捨選択の上で先行の情報を取り入れ、より詳細な資料として完成させたのが『宋詩紀事』だと言える。

更に、連文鳳の項では、最後に連文鳳とは直接関係ない、「黄灝月泉吟社序」、「送詩賞小劄序」を載せている。これは『月泉吟社詩』からそのまま引用したものである。こうした表記は他にも見え、卷八十一周暎（月泉吟社第十九名）の項には「送詩賞小劄」として羅

公福以下7名分、朱孟翁の項には5名分の文章を載せる。ただし朱孟翁にはこの「小筍」がないことを、厲鶚は指摘している。巻八十五必范（月泉吟社第二十名）の項には「学古翁回詩賞劄」と本人の文章を載せる。このように、『宋詩紀事』自体は詩人別の総集なのだが、それに収まらない月泉吟社の情報を、参加詩人の各項目に散らしながら記録し、『宋詩紀事』全体をみると、『月泉吟社詩』の全体像がほぼ見えるようになっているのである。これは、『宋詩紀事』が『月泉吟社詩』という詩集を歴史的な資料として伝えようという意味を示すものである。詩人の作品が個人の作として独立するものではなく、詩社という集合体の中から生まれたものである、という背景もまた重要視しているのである。巻八十一には、摘句図として、寓名と一部の詩句のみを、『月泉吟社詩』そのままに載せる。これは編纂時点では不明であっても、後に明らかにされることを期待してのものと思われる。事実、清朝の地方文献の中で、摘句で「自家意思」と署名されていたのが、建安の劉辺であったことが明らかにされている。<sup>14)</sup>

『宋詩紀事』は、莫大な数の詩と詩人を収録するが、それはこうした詩社の記録を拾い、また句のみ、寓名のみ、詩人も記録したことによる。『四庫全書総目提要』巻一百九十六に「然全書網羅駭備、自序称閱書三千八百一十二家。今江南、浙江所採遺書中、經其籤題自某処鈔至某処、以及經其点勘題識者、往往而是、則其用力亦云勤矣。考有宋一代之詩話者、終以是書為淵海、非胡仔諸家所能比較長短也。」と、蔵書家のもとで多くの書籍を調べ、力を尽くした作業により、著名人だけではない、宋一代の詩壇の諸相全てを伝えようとする情熱の一端が、この『月泉吟社詩』の記録には濃厚に現れていると言えよう。

## 5. 地方文献の資料として

最後に、清代に詩社の詩人の記録が残されたことの影響の一つとして、地方文献との関わりに触れておく。『月泉吟社詩』の取りあげ方が、清代になって詩社というイベントよりも、詩人の記録にこだわるようになったのは先に見た通りである。その結果、『月泉吟社詩』の詩人は、詩会の詩ただ一首で、歴史に詩人として名を残すこととなった。それは清代が、地方文献あるいは地方誌の文苑伝を充実させようという動きがあったことと関わりがある。蒋寅は、宋元以後、地方誌の編纂が盛んになり、明清になるとあらゆる地域で地方誌が編纂されるようになったこと、とりわけ清代では地方別に作家をまとめた芸文志などが爆発的に増えたことを指摘する。<sup>15)</sup> 『月泉吟社詩』は、清代になると歴史的資料や地域文献の中に、広く取り入れられる。例えば、月泉吟社が開かれた金華の地方誌を見てみると、明の『万曆金華府志』には月泉吟社の記載はない。清初の『康熙金華府志』にも記載はないが、清末の『光緒金華県誌』には、「楊本然、姜霖、劉時可、朱积老、俞自得、桑柘区、並宋末人……月泉吟社。……本然、字舜举、号竜溪、署名栗里、第七。霖、字仲沢第二十六。時可第三十二。积老、署名亀潭、第三十八。自得、号吟隠、第四十二。柘区不詳姓名、第五十六」と、参加詩人の月泉吟社における順位と小伝が記載される。また参加詩人を多く輩出した『杭州府志』では、明の『万曆杭州府志』には月泉吟社の記載は無く、清の『乾隆杭州府志』に至り、厲鶚『宋詩紀事』を引用して、杭州人梁相、全璧らが

月泉吟社に参加したことを記載する。同じく『鄞県志』にも、乾隆以降、月泉吟社の詩人の記載が見える。これは雍正年間の『南宋雜事詩』、乾隆年間の『宋詩紀事』の影響が大きいと考えられる。実際『月泉吟社志』からではなく、『宋詩紀事』から記事を引用する例が見える。この他にも、特に地域文学をまとめた総集の中に、『月泉吟社詩』の詩人は広く取りあげられる。『全浙詩話』は、月泉吟社以降の詩社・詩会の詩や詩人を収録するが、月泉吟社がそうした詩社・詩会の記録が盛んになるきっかけを作ったと言えよう。ただ、地方誌との関連については複雑な内容を含んでおり、稿を改めて論ずることとする。

## 6. まとめ

以上、月泉吟社の記録が、明清という時代の中でどのように変化したかを、代表的な文献から検証した。始めは月泉吟社という詩会の活動記録として取りあげており、詩人個人への注目は少なかった。やがて詩集に収録された無名の詩人が様々な文献に取りあげられるようになり、いつの間にか時代や地方を代表する詩人として扱われるようになっていった。また地方文献の資料として用いられるという、清代の動きの中で、『月泉吟社詩』は、詩社や詩会という集団の場での詩や詩人を取りあげる材料の濫觴となった。それは詩集としてではなく、歴史資料としての役割である。こうした状況の中で、清の詩会、詩社の役割自体が変わっていたのではないだろうか。つまり地方文献に資料を提供するための、詩会で地方の名所を分担して詠むということなどが行われたと思われるのだ。つまり詩会は最初から資料を提供するものとして仕組まれることが増え、詩社の存在に変質をもたらすことになったのである。その始まりがこの『月泉吟社詩』の記録にあることは、大いに注目すべきことであろう。

## 注

- 1) 版本により『月泉吟社』と『月泉吟社詩』との二通りの名称があるが、詩社名としての月泉吟社と区別するため、本稿では『月泉吟社詩』の名称を用いることとする。よって汲古閣本は『月泉吟社』と称しているが、本稿中では『月泉吟社詩』と表記する。
- 2) 王徳明「論宋代的詩社」(『文学遺産』1992年第6期)
- 3) 王徳明「論宋代的詩社」(文学遺産 1992 第6期 p67)では、『宋詩紀事』卷七十九所収の黄庚「秋色」の詩題の詩題の下に「山陰詩社中選。」という自注があること、また同作者「枕易」の詩題の下にも「越中詩社試題都魁。」の自注があることから、山陰詩社が「秋色」を題としたコンクールを開催し、黄庚の詩が優秀作として選ばれたこと、越中詩社が「枕易」という詩題でコンクールを開き、黄庚の詩が第一位となったことを示すものであると指摘する。
- 4) ただし呉涓の刊行した詩集は現存していない。各種の版本については、方勇「元初月泉吟社詩集版本考略—兼駁四庫提要“節録之本”説」(『河北大学学报』(哲学社会科学版)1996年6月25期刊)を始めとし、鄒艷・袁演「月泉吟社の寓名、成員及詩集版本考証」(『南昌大学学报』(人文社会科学版)第42卷第6期 2011)、鄒艷『月泉吟社研究』



(人民出版社 2013)等に考察がある。

- 5) 吉川幸次郎『元明詩概説』(岩波書店 中国詩人選集二集 1963)
- 6) 原文には「社約」の語はなく、『四庫全書総目提要』に従う。また、陶宗儀『說郛』卷八十四下(『四庫全書』所収)には「社規」と表記する。
- 7) これらは、諸本により順序に異同がある。ここでは「詩詞雜俎初集」(京都大学人文科学研究所蔵書)所収の汲古閣本『月泉吟社』一卷を底本とする。
- 8) 歐陽光『宋元詩社研究叢稿』(広東東高等教育出版社 2011)「月泉吟社の結社与活動形式」p75。原文は以下の通り。「《月泉吟社詩》所録前六十名作者署名皆用寓名、而別注本名、字号、籍貫于其下。…此別注看来非原刻本所有、而系後人所加、故有的只有寓名而無別注、有的則別注過簡、無從得知其真名。」
- 9) 四庫全書本には、毛晋跋文なし。
- 10) なお、後の『宋詩紀事』でも、この人物については、月泉吟社の順位以外の情報を記さず、無名子として扱っている。
- 11) 近年の研究で『月泉吟社詩』の詩人達が、詩社開催時には遺民の状態であったものの、その後元王朝で任官した者が多いことが明らかにされてきた。慈波「遺民之外：詩歌史上的月泉吟社」(『文学遺産』2018年第5期)は、月泉吟社の詩人に対する研究者の研究成果をまとめ、その上で元で任官したものが多し事実を指摘している。しかし、陳堯道については仕官しなかった、としている。
- 12) その他「劉存行」は、『南宋雜事詩』(『四庫全書』)では「劉存存」となっているが、後に『宋詩紀事』では「劉存行」と訂正されている。
- 13) 『宋詩紀事』出版説明(上海古籍出版社 1981)に「於是利用揚州小玲瓏山館馬氏藏書、從宋人文集、詩話、筆記、以至山經、地志等各種珍秘典籍中輯撰成書。……………康熙時編的「宋金元明四朝詩」、宋詩僅占七十八卷八八二人。吳之振等所輯的「宋詩鈔」僅有一百六卷、目錄列作家一百人、實際僅八十四人、而且規定入選作家和作品都必須有專集和詩五首以上、無專集或不滿五首者、均不輯入。……宋詩紀事入選的作家達三千八百十二人(拋厲鶚序)之多。」とある。
- 14) 『閩詩録』戊集卷一ほか。
- 15) (蔣寅『清代文学論稿』(鳳凰出版社 二〇〇九)「清代文学与地域文化」に「宋元以後、方志的編纂日益興盛、到明清則上自省府、下迄鄉鎮、乃至名山大川、古蹟勝地、都有志書。……到清代、地域性詩文集的数量就猛然劇增、難以統計了。」とある。

※本論は平成二十九年～三十一年度科学研究費補助研究 基盤研究(C)17K02653「清朝康乾年間における杭州詩人集団の詩会活動と地方文献編纂に関する研究」の研究成果の一部である。

## The Record of *Yuequan Yinshe Shi* and Its Changes

Nobuko ICHINOSE

*Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

Abstract: *Yuequan Yinshe Shi* is the record of a poetry meeting held after a call for submissions of poems from poetry associations in various regions of Zhejiang in the early Yuan dynasty. For this poetry meeting, poems were submitted according to a given theme in advance, and then ranked by the organizer. Prize money was awarded accordingly. Out of approximately 2,700 people who submitted poems, 280 were accepted. *Yuequan Yinshe Shi* is the record of poetry of 60 out of the 280 people. *Yuequan Yinshe Shi* was widely transmitted to later generations and has been taken up in many books, perhaps due to its uniqueness among the records of other poetry meetings of the period. It was organized by the people from the conquered nation that Song dynasty and featured numerous participants. As group poetry, poems from poetry meetings not commonly seen as very important, but as *Yuequan Yinshe Shi* passed through the Yuan, Ming and Qing dynasties and later periods. They came to be increasingly taken up. The general attitudes in each period as to how literature should be recorded had a major influence on these changes. Through *Yuequan Yinshe Shi*, this study examines the process by which records of poetry meetings come to function as biographical material about poets and as historical documents for local magazines..

Key Words: *Yuequan Yinshe Shi*, the record , poetry meeting